

博士論文（要約）

ヘルバルトの哲学および教育学における「完全性」概念の位置づけ  
に関する研究

小山裕樹

本論文は、19 世紀ドイツの哲学者・教育学者であるヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 1776-1841) が用いる「完全性 (Vollkommenheit)」という概念に注目し、この概念を軸として彼の理論を再構成することを目的とする。また、この再構成を通じて、ヘルバルトの理論においてこれまで見過ごされてきた新たな側面を浮かび上がらせることを目指す。以下、本論文の内容を章ごとに要約し、示す。

序章では、ヘルバルトと当時のプロイセン政府との間で生じた教員養成をめぐる対立に注目し、この対立を考察する二つのアプローチを示しながら、先行研究の整理と、本論文の課題設定を行った。先行研究では、ヘルバルトの初期と後期の「学問」理解のずれがこれまで大きな関心事であり、特に近年では初期の「学問」理解に基づいて後期の問題構成を捉え直す解釈が主流である。こうした解釈から先のヘルバルトとプロイセン政府の対立を捉えると、この対立では「理論」と「実践」(「学問」と「技術」)の乖離が焦点であるように見える。なるほどこうしたアプローチもあり得るが、本論文では、この同じ対立を、「完全性」概念に基づく教育を推し進めようとしたヘルバルトと、これと原理的に対立する「経済的合理性」に基づく教員養成制度を求めたプロイセン政府の間の対立として捉える可能性を示した。そのうえで、改めて研究の課題をヘルバルトの「完全性」概念に設定し、この「完全性」概念をめぐる先行研究の整理も行ったうえで、この「完全性」概念を通じてヘルバルトの理論を再構成し直すという目的を示した。

第一章では、ヘルバルトがなぜこの「完全性」概念を自らの理論に組み込もうとしたのかという点について考察した。それは、カントやフィヒテらの「超越論的自由論」との対決があったからである。この「超越論的自由論」は、人間をアприオリに「自由」だと見る。しかし、ヘルバルトは、教育学者の立場から、人間は徐々に「自由」になる、あるいは「教育」によって徐々に「自由」になると見る。こうした生成変化の連続的かつ漸進的なプロセスについて語るとき、「完全性」概念は有益であった。彼は、ヴォルフ学派からの影響のもと「完全性」を「量的」概念として捉えており、「量」は連続的かつ漸進的な増大について語り得るのである。しかし、教育目的としての「自由」(=「道徳性」)を「全量」として見据えたこの連続的かつ漸進的な「量的」増大のプロセスは、果てしない「無限」のプロセスとなる。「量」とは元来相対的な概念であるから、一定量まで「量的」増大を果たしたところで、その先には必ずさらなる「多量」が控えていて、プロセスには限りがなくなるからだ。この限りないプロセスに巻き込まれるとき、我々は、教育目的に永遠に辿りつけないという苦悩を感じるのではないかと予想されたが、ヘルバルトはむしろ、このプロセスに「喜び (Gefallen)」を見出した。とはいえ、そうはいつでもやはり、この「無限」のプロセスが我々を苦しめ追いつめる可能性は残るのではないか。「完全性」という発想にそもそも反省を促すようないわば限界づけの契機は、ヘルバルトの理論のうちに見出されないのだろうか。これが、続く第二章および第三章へと持ち越される問いとなった。

第二章では、ヘルバルト教育学の中心的な概念の一つである「陶冶可能性 (Bildsamkeit)」概念の意味を、本論文の主題である「完全性」概念との関わりから捉え直すことを試みた。両概念は、その概念史的な来歴を辿っても、意味的な連続性を有している。すなわち、概念史的に見ると、「完全性」・「完成」・「完成可能性」といった概念から「陶冶」・「陶冶可能性」といった概念へと、人間の「成長」を語る語彙が徐々に変化していった。ただし、この歴史的変化は、一方では連続的なものであったが、他方では前者の概念グループと後者の概念グループとの間に意味的な断絶があったともされる。その断絶をもたらした契機の一つとされるのが、例えばヴィルヘルム・フンボルトの思想に特徴的な「ギリシア」的な「個性」の重視や「個の多様性」の尊重である。これらを契機として、前者の概念グループと後者の概念グループとの間に断絶が生じたとされる。本論文では、ヘルバルトの理論のうちにも、こうした

連続性と断絶の両方を見出した。上記の概念グループのうち、彼が多く用いる「完全性」概念（前者のグループ）と「陶冶」および「陶冶可能性」概念（後者のグループ）に注目すると、両概念には明らかに意味上の連続性があるが、同時に、両概念には意味上の断絶もまた読み取れる。しかも、この断絶には、ヘルバルトにおいてもやはりフンボルトと同じく「Individualität＝個性」という概念が強く影響していた。「個性」概念は、「完全性」概念を意味的に限界づけながら、多様な「個性」を許容する方向へと人間の「成長」に関する考え方を徐々に開いていったと思われる。なお、こうした「Individualität」概念による「完全性」概念の限界づけというモチーフは、議論の位相を変えながら、次の第三章へも引き継がれた。

第三章では、議論を歴史哲学的な位相へと変え、この歴史哲学的な位相のなかでヘルバルトの「完全性」概念の意味を捉えた。もともと「完全性」概念は、個人としての人間の「完全性」という議論の位相と、種としての人間（＝人類）の「完全性」という議論の位相という二つの位相を有している。第一章と第二章は前者の位相を、この第三章は後者の位相を扱うことになった。後者の位相をめぐって、ここでは、カントとフィヒテの「完全性」概念および歴史哲学と、ヘルバルトの「完全性」概念および歴史哲学とを比較検討した。この比較検討の結果として明らかになったのは、ヘルバルトから見て、カントとフィヒテの議論が、種としての人間（＝人類）の「完全性」を重視するあまり、個人としての人間の「完全性」を軽視してしまっているという事態であった。ヘルバルトはそこで、種としての人間（＝人類）の「完全性」の追求が「Individualität＝個人」の尊厳を傷つけてはならないとして、「完全性」概念を限界づけていた。議論の位相は違うが、ここでも「完全性」概念は「Individualität」概念によって限界づけられた。

第四章では、ヘルバルトの「完全性」概念を心理学的な射程において再検討した。ヘルバルトの心理学は、一般に「表象心理学」と呼ばれ、様々な「表象（Vorstellung）」が結合したり離反したりする力学的運動を研究するものである。この心理学のなかで、様々な「表象」はお互いに結合し合って「表象塊」＝「思想塊」を形成するが、この「表象塊」＝「思想塊」が「完全性」という「量的」な尺度によって測定されると言われる。こうした議論は、人間の心を測定可能な機械であるかのように捉えているとして、これまで厳しく批判されてきた。しかしながら、ヘルバルトは、あるときには人間の心の成長を「表象円（Vorstellungskreis）」＝「思想円（Gedankenkreis）」の構築過程として描いたり、またあるときには「球体（Kugel）」状の「表象塊」＝「思想塊」の構築過程として描いたりしている。こうした「円（Kreis）」や「球体（Kugel）」というシンボル自体の意味に注目すると、この「円」や「球体」は、ヨーロッパで古代から「完全性」を表わすシンボルとして用いられてきたものであると分かる。つまり、ヘルバルトは、一見すると機械論的に見える自身の心理学のなかに、こうした奇妙なシンボルを組み入れていたのである。これはどうしてだったのか。本論文は、この点に、機械論を超えた「自由」で「道徳的」な人間を育てようとする教育学者としての彼の意図を読み取った。「円」や「球体」のようなシンボルは、機械的なメカニズムの支配する有限な世界を超え出て、「自由」や「道徳性」の拠点である超感性的な無限の世界への跳躍をシンボリックに可能にさせる概念装置だった。そして、人間をこうした「自由」や「道徳性」へと促す営みこそ、ヘルバルトにとっての教育だった。

第五章では、補論として、ヘルバルト以後の心理学史の一断面を、ヴィルヘルム・ディルタイによるヘルバルト（派）的な心理学の批判、すなわち「説明心理学（*erklärende Psychologie*）」の批判という論点に基づき、整理し直した。ヘルバルト以後の心理学史のなかで、ディルタイは、ヘルバルト（派）的な心理学（＝「説明心理学」）を厳しく批判し、エビングハウスの心理学を含め、こうした「説明心理学」をベルリン大学哲学部の心理学研究から追放しようとした。しかし、ヘルバルトからディルタイへ

と至る心理学史の流れは、通常言われているよりも歴史的な連続性が高いと思われた。第五章では、ヘルバルトーヘルバルト派のラツァルスーデイルタイという心理学史の流れに注目し、この三者の心理学を比較検討した。そして、この比較検討を通して、人間の社会的で文化的な諸現象を扱おうとする学問的な問題関心の面と、心理学の研究を行ううえでの学問的な方法論の面という二つの面において、この三者の心理学が必ずしも対立せず、（もちろん違いはあるものの）ひそかな連続性を持つ心理学であった可能性があることを示した。

終章では、本研究の各章を通じて得られた成果をまとめ、残された課題を示しながら、今後の研究の方向性を展望した。